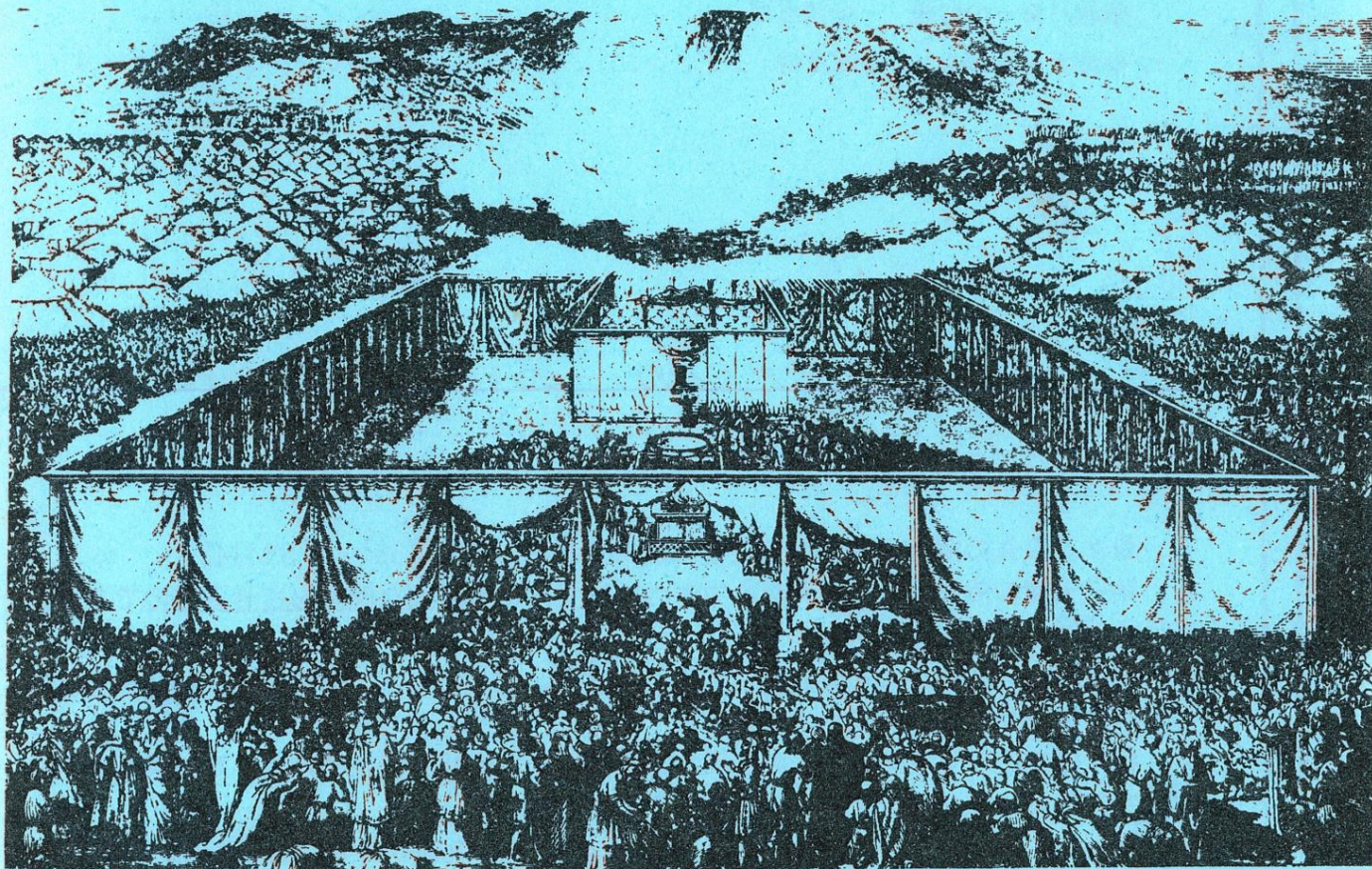


アンカー Anchor



すべての者は、自分たちの大いなる大祭司
キリストの立場と働きについて、自分で知
っている必要がある。そうしなければ、こ
の時代にあつて、必要な信仰を働かせるこ
とも、神が彼らのために計画しておられる
立場を占めることもできなくなる。大争闘 2 2 2

● 目次 ●

セブンスデー、アドベンチストと踊り	マーク、デュワーテ、	1
信仰と行い	デビッド、ミラー、	6
最後の戦い	金城重博、ダニエル11:40～、	15
宗教パワーの台頭	金城重博、	21
他教派を真似る	金城重博、	24

◎◎◎◎◎アンカーの目的◎◎◎◎◎

我々は次のことを信じてアンカーを出版している。

1. 我々SDAの働きと使命は三天使の使命である。(6T384、2SM142)
2. 第三天使の使命は人々を再臨の栄光の前に立ち得る特別な備えをさせるものである。(9T98、KT140)
3. 第三天使の使命は人々の心を至聖所に向ける。そこにおいて信者は最後の、特別なあがないを受ける。(初文414、5、7)
4. 我々は神のもくろまれたこの特別な祝福、特別な体験を拒み続けてきた。特に1888年以来。(RH8/26、1890)
5. ダニエル8:14の聖句は再臨信仰の土台であり、御業の完成はこの聖句の正しい理解にかかっている。(生き残る人々422、EV221、5T575)
6. エレン・G・ホワイトは聖書の預言者と同様の靈感が与えられた預言者である。(ISM36)
7. 最後の時代の嵐に押し流されないようにさせるアンカー(錨)は、三重の使命、聖所、安息日、人の性質、イエスの証(預言の霊)等である。(初文417、1T300)
8. アンカーはリレーの最終走者の意味がる。この世代は福音の働きが信者の中に、外の世界に完成する最後の時代である。不信仰によって、140年以上も時が延ばされ、イエスの十字架の苦しみを増している。(大下182、教育328)。信仰による義認の体験によって、再臨を早めることをキリストは待っておられる。再臨と御業完成をこれほど遅らせているのが我々神の民であるとするならば、我々の今日の義務は何か、約束のものを受ける条件は何なのか研究し、共に備えたいと思う。



セブンスデー・アドベンチストと踊り

マーク・デュワーテ

セブンスデー・アドベンチストは、昔のイスラエルと同じ様に、この最後の時代に、特別な働きを成し遂げるために神によって起こされたものである。サタンは神から与えられた目的から猛烈な勢いで民をそらすようにこの両方に働きかけた。なぜなら、そうすることによって、この罪に病んだ世界で、神の救いの働きを遅らせ、失敗させ、破壊することを望んでいるからである。その目的を達成するために、サタンはいかなる策略でも使うのであるが、その中でも、大いなる成功をおさめているのは、世俗主義である。それは、イスラエルにおいて成功したし、SDAにも成功している。事実、それがあまりにも成功しているので、E. G. ホワイトは靈感によって次のようなことを書くに至った：

「世と多くの自称クリスチャンの間の境界線が、ほとんど不明瞭である。かつて熱心であったアドベンチストが世と妥協している。そのなす事、習慣、その利己主義においてそうである。世を神の律法に服従するように導いているのではなく、教会が律法の違反へとますます近づいているのである。日毎に教会は世に転回しつつある」(8 T 118~119)。

イスラエルがエジプトから出てまもなく、(ちょうど、我々が霊的バビロンから導き出されたごとく)彼らは世の道に後ずさりした。(出エジプト記32:7~8)。この場合、サタンがイスラエルを指揮して背教に導いたのは、踊りであった。

「モーセが宿営に近づくと、子牛と踊りと

を見たので、彼は怒りに燃え、手からかの板を投げうち、これを山のふもとで砕いた」(出エジプト記32:19)。「歌と踊りに浮かされ、異邦の女達の美しさに魅せられて、彼らは主への忠誠心を捨ててしまった」(人類のあけぼの、下67)。

ある人は、この場合は、おそらくワルツやフォークダンスと違うのではないかと反論するであろう。しかし、踊りには二つの種類しかない。一つは真の礼拝であり賛美の一部としてのそれと、もう一つはその他すべてが含まれている。イスラエル人が陥った踊りというのは後者の方であったことは明らかであり、サタンが彼らに対して使った道具であった。SDAコメンタリーは、この最初に挙げた部類の踊りについてこう言っている。「聖書にある踊りは、現代の

西欧文明社会の（「スクエアダンス」と呼ばれているものでさえ）社交ダンスとは似ても似つかぬものである。聖書に表われてくるそれは、大抵女性によってなされた。しかし、男性が参加することもまれにあった。その場合であっても、異性間の肉体的接触があった証拠はどこにもない」（8 B C 262～263）。契約の箱がエルサレムに持ち帰されたときに、ダビデが表現した踊りは荘厳なもので、このたぐいのものであった。（2サムエル記6：14～16；歴代上15：29）。靈感の書は、続けて次のように言っている：

「ダビデが神の前で、敬虔な喜びに満ちて踊ったことを引用して、快樂愛好者達はいま流行している社交ダンスを正当化しようとするが、これは、そうした議論の根拠にはならない。今日、ダンスといえば、道楽と夜半の酒宴と結びついている。箱を移動するに当たって、喜びにあふれて神をたたえた音楽と踊りは、今日のダンスという娯楽とは、少しも似通ったところがなかったのである。一つは、神をおぼえて神の神聖なみ名を高めるものであった。他のものは、人々に神を忘れさせ、神のみ名を汚させるサタンの手段である」（人類のあけぼの下 402）。

ここでも注意していただきたいことは、二つの種類の踊りに言及されていることである。一つは聖書的なもので、今は失われた芸術であり、他は世俗的でサタンによって使用されるものである。

踊りは神の民の中に、教会に、機関にそして教会学校に（特に、この日本で）さえ忍び込んできている世俗主義の一つの表われである。このような活動を弁明する一つの理由は、それは地域社会の文化であり、また習慣の一部であるからという事である。しかしながら、ただ文化的であるからという理由で、クリスチャンがそれにたずさわることを是認してもいいだろうか？人を食

べることが風俗習慣であるという所もあるが、我々が人食い人種の間にいるからといって、地域社会の習慣と調和するという事だけで、我々も人を食い始めるべきであろうか？ある国では、偶像礼拝が国の風俗、文化になっている。またあるところでは、唇の中にお皿を付けたり、また肌にも着けないで走り回るといった習慣がある。文化や習慣というものは、必ずしも正しいものではない。特にクリスチャン原則につまずきの石となる場合はそうである。

「主義を犠牲にする必要がない限り、郷に入っては郷に従うべきである。しかし、主義を犠牲にしてまで世間の習慣に従うことが真の礼儀であるとはいえない」（教育283）。

「世俗の習慣に従うならば、教会が世俗化する。それは決して世俗をキリストに改宗させることにはならない」大下248。

「神の民に絶えずつきまとってきた最大の危険の一つは、世俗の格言や風習であった。特に青年達は絶えざる危険にさらされている」（家教509）。

また神のみ旨に反しているあらゆる習慣や文化について聖書は次のように述べている：「異邦の民のならわしはむなしいからだ」（エレミヤ10：3）。

我々は、これらのむなしい習慣が青年達を特別に魅惑することを讀んだところである。我が教会、機関また教会学校などで、青年達を含む活動を計画する際、特別な注意が払われなければならない。

「我々の学校（または教会）において、その設立された目的に相反するものは、何一つ許されるべきではない」（Unpublished Manuscript Testimonies, p. 76）。

従って、世俗の踊り（ダンス）に参加したり、それを取り入れたプログラムを計画することは許されるべきではない。また我

々は、我々の行事や催し物に人々を集めるために、そのようなことをする必要もないのである。神は我々に高い標準をお与えになった。そしてそれらを高く掲げ続けるのが我々の義務である。

「我々の信仰は、我々が標準を高め、前進することを要求するのである」(1T 488)。

「神は、我々の信仰と品性において、特有のものを持ち、世の人々の標準をはるかに越えるものを持つことを要求しておられる」(5T 54)。

「真理が生活に実行されると、聖書の要求に従って、標準は絶えず上へと高められるべきである。これは必然的に世俗のファッション、風潮、習慣や格言に対抗する結果を生み出すであろう」(6T 146)。

下記の引用文は、踊りについて更に学びたい者のために記しておく：

「悪影響をもっているもう一つの娯楽の形は社交ダンスである。...

『神を愛するよりも、快楽を愛する』世俗的で、不注意な大衆に加わって、宣伝された娯楽に加わることを奨励しないようにしよう。リクリエーションは重要である。我が教会員を中心とした友情を深めるリクリエーションをするように努めるべきである。」(SDA Church Manual, p. 146)

「我々はもう一つたしかな事実を知っている。教会内には、ほとんど全般的にリバイバルの精神が欠けている。霊的無関心がほとんどすべての者を覆い、恐ろしいまでに深刻である。全国の宗教雑誌が、そう証言している。流行の追及が広く教会員の間に行われ、娯楽のパーティーやダンスやお祭さわぎなどで、神を敬わない人々と手を握っている。... 教会が一般に悲しむべき望

落に陥りつつあることを示す証拠は、我々の回りに山積していることだけで十分である。教会は主から遠く離れ、そして主は教会から退去された」大下77(チャールズ・フィニーの言葉)。

主の僕はクリスチャン両親について次のように述べておられる：

「彼らは、世俗の習慣に自分の心を奪われてしまうようなことは許さない。彼らはパーティー、コンサート、ダンスや宴会を催したり、そのような場に出席したりすることにふけることもしない。なぜなら、それらは異邦人の習わしだからである」(2BC 1039)。

これは全てのSDAクリスチャンに関して言えることでなければならない。

「今日世間で俗受けしている娯楽の多くは、クリスチャンであることを主張する人々にとってさえも、異教徒に対すると同じような結果を生じがちである。サタンが人間の魂を破壊するのに利用しようとする娯楽はきわめてまれである。」(アドベンチスト、ホ593)。

この引用文は続けて「ダンス」やその他のものについて次のように言っている：

「... サタンは原則の壁を打ち破り、肉慾にふける門戸を開くために利用している」そのような活動によって「神を忘れ、永遠の闘争を見失わせるような楽しみのための会合において、常にサタンが人々の魂の回りに、彼の鎖をまきつけているのである」(同上)

「真のクリスチャンは、神の祝福を求めることの出来ない娯楽の場所へ出入りしたり、遊びに加わったりしたいとは思いません

ん。こういう遊びをしたいという人々に対する答は、ナザレのイエスのみ名において私たちはそうした遊びにふけることができないということです。劇場やダンスホールで過ごした時間の上に、神の祝福はくだりません。……

信仰を告白している者が、何か有害な道楽をもっていると、その事について言い訳をするのが通例です。罪に憤れることによって、人々はその恐ろしさに盲目になっています。神の子と自称する多くの人々が、不敬虔な宴会騒ぎを教会の何かの慈善目的と結びつけることによって、神のみ言葉に禁じられている罪を言い逃れようとします」青年399、400。

「今日行われているようなダンス遊びは、墮落の学校であり、社会にとって恐るべき災いです」青年401。

エレン・ホワイトはある時、象徴的な天国への道をたどっている夢を見た。ある一つの場面では「下の谷間」から音が聞こえてきたのである。その音の中に「軍歌やダンス曲」が混じっていた（LS 191）。踊りの音楽がどこから聞こえてきたかに注意してほしい。天から聞こえていたのではない！おそらくこの引用文は主にダンスホール（今で言うディスコ）を指しているのだが、どんな音楽、また踊りであっても、それは聖書的でないとすれば、何であろうか？

踊りにはなんらかの明確な利益があるだろうか？主の僕によれば、踊りは「誰に対しても益にならない」多くの娯楽の一つであると述べている（FE 75）。

踊りは「悪への傾向……風采の悪い印象」を与え、また「キリストとその弟子達の教えに真っ向から反する」ものなのである（IT 490）。

踊りは「我々が承認できない」娯楽の一つである。

「……なぜなら、これらは天がとがめているものである。このような娯楽は多くの悪への門戸を開く。クリスチャン達は、全てこのような遊びを責めるべきである。その代わりに、全く書を及ぼさないものを取り入れるべきである」（1T 514）。

「一步一步、世はノアの時代のような状態に達しつつある。……彼らは踊っては飲み騒ぎ、酒、タバコを飲み、動物的肉欲にふけり、ほふり場に引かれる牛のように進んでいく。サタンはありとあらゆる巧みさと魅力を持って、人が盲目的に突っ走って行くようにと働きかけているのである。……」（EV 26）。

「……あなたが、聖書に記されているキリストの生涯を注意深く学ぶとき、そして聖霊によってありのままの姿のキリストがあなたに示されるとき、その時、踊りはクリスチャンの生活に取り入れられるべきものではないことが自分自身で納得できるはずである」（R&H article, "Should Christians Dance?" RH, Feb. 28, 1882）。

「神のみ旨に全的に従うことによって、我々は有利な地位に置かれ、世俗の習慣や習わしからきっぱり離れる必要を理解するであろう。

我々は、我々の標準を世の標準より少し高く持つのではなく、その区別は、はっきりさせねばならないのである。我々がいままで親戚や知人にわずかな影響しか及ぼせなかったのは、我々の習慣と、世俗の習慣との間にはっきりした区別がほとんど見られなかったからである。……誰も俗人のようにふるまっているながら、世の大勢に押し流されないでいることはできない」（6T 146～147）。

「我々が、主がお望みになっておられる標準に到達するとき、世の人々は、セブンス

デー・アドベンチスト達を風変わりな堅苦しい極端主義者と見なすであろう。「わたしたちは、全世界に、天使にも人々にも見せ物にされたのだ。」(FE 289)。

「我々は、主によって贖われた者のために築かれた道から下り、世俗の標準に下がることによって、我々と世の人々との間(距離)を狭めようとしてはならない」(4T 571)。

「私たちは嘲笑を避けようとして、慣習に一致するために真理を犠牲にすることが多すぎる」(家教280)。

「多くの人々は、おもしろくない批判や

意地の悪いうわさの種になることを恐れて、あえて主義に従って行動しようとしません」(青年402)。

我々は、このような類の人々ではなく、キリストが再びおいでになる日まで、彼に全く従って行く人となれる様に、努力しようではないか。「そこで、兄弟たちよ。堅く立って、わたしたちの言葉や手紙で教えられた言伝えを、しっかりと守り続けなさい」(2テサロニケ2:15)。「……わたしたちの告白する信仰をかたく守ろうではないか」(ヘブル4:14)。(ヘブル10:23;ピリピ4:8~9参照)。

そこで人々はあくる朝早く起きて燔祭をささげ、酬恩祭を供えた。民は座して食いのみし、立って戯れた」(出エジプト31:6)

「主の祭」をするという口実のもとに彼らは飲食にふけり、みだらな騒ぎを演じた。

人あ上372



モーセ、山を下る

出エジプト記 第34章24節

モーセはそのあかしの板二枚を手にして、シナイ山から下ったが、その山を下ったとき、モーセは、さきにと話ったゆえに、顔の皮が光を放っているのを知らなかった。アロンとイスラエルの人々が見ると、モーセを見ると、彼の顔の皮が光を放っているのを知り、彼らは恐れてこれに近づかなかった。

信仰と行い

デヴィッド・ミラー

かつて地上にあった聖所の至聖所にあった契約の箱がどこにあるか、私は知っている。それはネボ山の洞穴の中に隠されているのである。エレミヤがバビロニア人によるエルサレム侵略から逃れてエジプトへ行く前に、その箱をそこに隠したのである。

それを見つけるのは比較的容易である。但し、今年の4月まで待たなければならない。4月1日に日が沈む頃、ネボ山の真西にある山の影が真東に向く。その影の先が、丁度ネボ山のふもとにかかるとき、その先は小さな洞穴に至る小道を指しているはずである。その洞穴は山のふもとから約10メートルのところにあるのだが、下からは見ることはできない。契約の箱は、その洞穴の入口から20メートルほど中に入ったところにある。箱は2500年以上もそこに安全に眠っているのである。では健闘を祈る。

◆いつ出発する？

さて、あなたはいつ契約の箱をもとめて旅に出たいと考えているだろうか。あなたなら旅行の計画を立てるだろうか。上述した私の話を信じるだろうか。どうして信じられるだろうか。恐らく私の子供達なら、私の言うことを信じるであろう。私は彼らを食べさせ、着させ、保護し、彼らの必要を満たすためにありとあらゆることをしてあげてきたからである。彼らは私と私の決断に対して、全面的信頼を置いている。だがあなたが私を信頼できる根拠はあるのだ

ろうか。

神がイスラエル人に十戒をお与えになったとき、彼らは神に信頼すべきであった。神の律法は正当で、彼ら自身にとって有益であると、彼らは信じるべきであった。彼らは神に信頼して、神の命じられたことはすべてなすべきであった。神が「前進せよ」と言われれば、そのようにすべきであった。神が「止まれ」と言われれば、それは自分達のために言われたことであると信じるべきであった。とにかく神は長年の間、彼らと共におられ、彼らのあらゆる必要を満たしてこられたのであった。彼らがなぜ神に信頼してその戒めを守るべきか、神は御自らその理由を述べられた。十戒をお与えになる前に、神は次のように言われた：

「神はこのすべての言葉を語って言われた。『わたしはあなたの神、主であって、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である。』」（出エジプト記20:1, 2）

神は数々の大いなる奇跡によって、彼らをエジプトの地から導き出されたのである。イスラエルが神を信じ信頼するのに、疑問がさしはさまれてはならなかった。これを読んでいながらあなたが私を信用できないというようなものではないのである。契約の箱の所在地について、私が述べたことが真実であるという本当の証拠を私は与えていないからである。神はイスラエル人をパロの手から救い出された後、彼らに必要な食物

と水を与えてこられたのである。

更に神は証拠を与え続けられた。そして彼らに対して忍耐とあわれみを持ち続けられたのである。しかし彼らは信じようとはしなかった。彼らは従わなかった。神が入りなさいと言われたときに、彼らは約束の地に入って行かなかった。何故？それは彼らの不服従のためか、それとも不信仰のためだったのか。そのどちらであったのだろうか？

◆ 12人のスパイ

約束の地に12人のスパイ（斥候）が送られたとき、戻って来てその地は侵入可能だと言ったのは、12人の内たったの2人であった。彼らが肯定的な報告をしたのは、彼ら¹がその地で何か納得のできるものを見たからではなかった。彼らが確信を持ったのは、彼ら²が神の言葉に信頼していたためであった。彼らは次のように言った：

「わたしたちが行き巡って探った地は、非常に良い地です。もし、主がよしとされるならば、わたしたちをその地に導いて行って、それをわたしたちに下さるでしょう。それは乳と蜜の流れている地です。ただ、主³にそむいてはなりません。またその地の民を恐れてはなりません。彼らはわたしたちの食い物にすぎません。彼らを守る者は取り除かれます。主がわたしたちと共におられますから、彼らを恐れてはなりません。」（民数記14：17～9）

彼らがそのように述べたのは、神の言葉に信頼していたからであった：

「カレブは、何が起こったのかに気づき、あえて神の言葉の正しさを守るために立ち上がった。カレブはできるかぎり⁴を尽くして、不忠実な仲間たちの悪影響を阻止しようとした。・・・彼は、すでに斥候たちが

言ったことと反対のことは言わなかった。城壁は高く、カナン人は強い。しかし、神は、イスラエルにその国を与えるとお約束になったのである。「わたしたちはすぐにのぼって、攻め取りましょう。わたしたちは必ず勝つことができます」とカレブは勧めた（人類のあけぼの上466ページ）。

カレブは「神の言葉を擁護するために（英語原文）」立ち上がった。神はイスラエル人に、カナンに入りなさいと言われた。神は彼らにその地をお与えになったのである。カレブとヨシュアは神を信じた。他の者達は信じようとしなかった。それは、神の言われたことに信頼を置くか、それとも人の能力に信頼を置くかの問題であった。更にホワイト夫人のコメントを読んでみよう：

「彼らは、神を考えに入れなかった。そして、ただ武力だけに頼っているかのように行動した。彼らは、自分たちの不信仰によって、神の力を制限し、ここまで彼らを安全に導かれた手にたよらなかった。」（人類のあけぼの上466ページ）。

問題は不信仰であった。彼らは自分達の不信仰の故に、入って行くことができなかったのである。彼らはまた不従順でもあったと、ホワイト夫人は述べている。彼らは自分達が罪を犯したことを知った：

「今となっては、彼らは、自分たちの罪深い行為を心から悔いているように思えた。しかし、彼らの悲しみは、忘恩と不従順を感じたからではなく、むしろ彼らの悪行の結果のためであった。・・・「われわれは主⁵にむかって罪を犯しました。われわれの神、主が命じられたように、われわれは上って行って戦いましょう」と彼らは叫んだ（人類のあけぼの上471, 472ページ）。

それは不従順と不信仰のどちらであったのだろうか。答えは、「両方」である。それらのどちらかにだけ陥るということはありません。神は彼らに、入ってきなさいと言われた。神は彼らにその地をお与えになった。彼らには、神の言われたことを信じる信仰がなかったのである。彼らは神の言葉を信じなかった。信じなかったから、従わなかったのである。彼らには信仰がなかったので、不従順に陥ったのである。彼らが約束の地に入れなかったのは、不信仰と不従順のためであった。

◆彼らの方法

神に信頼することを拒み、神の言われることをするのを拒んだ後、彼らは敢えて神の言葉を軽視し、人間の方法でその地を攻め取ろうとした。彼らは荒野で死ぬであろうと神は言われたが、彼らはまたしても神に不信仰を抱き、御言葉に逆らったのである。彼らは約束の地に入って、都の1つを奪おうと決意した。

「われわれは主にむかって罪を犯しました。われわれの神、主が命じられたように、われわれは上って行って戦いましょう」と彼らは叫んだ（申命記1：41）。彼らは罪の結果、これほどまでに恐ろしく盲目になっていた。主は、「上って行って戦え」とはお命じにならなかった。彼らが戦って国を獲得することは、神のみこころではなかった。それは厳格に神の命令に従うことによって行われるべきであった（人類のあけぼの上472ページ）。

「彼らは、彼らと力を合わせて、カナンを占領するために働いて下さる神の力に信頼しなかった。それにもかかわらず、今度は神の助けを受けずに、自分たちの力だけで、その仕事をなしとげようとしたのである（人類のあけぼの上472ページ）。

「彼らは国に攻め上って、占領しようとして心に決めた。あるいは神は彼らの働き（行い）を受け入れて、彼らに対するみこころをお変えになるかも知れない。」（人類のあけぼの上472ページ）。

彼らは信仰によって生きようとしなかった。彼らは行いによる義認を固く信じていたのである。彼らの演ずるなんらかの行いが神の心に働きかけて、神は御自分の言動を自ら軽視し、彼らに好意を示されるかも知れないと彼らは考えた。神は彼ら独自の努力をお受け入れになるだろうと、彼らは考えた。彼らはつまり、自分達の業（行い）によって神に受け入れられることを期待したのである。

◆最終時代

地球歴史最後の時代に、日曜休業令が施行されるとき、これと同じような状況が再現されるであろう。このようなことが起る

のは、今日の宗教指導者達が、神の律法である安息日を無視する一方、自分達の作った法律（日曜遵守）を守ることによって神を喜ばすことができるだろうと考えるようになるためである。これらの指導者達は、自分達はそのような方法で神を喜ばすことによって、世の中から犯罪や邪悪を一掃できると考えるようになるであろう。彼らは昔のイスラエル人のように、神が命じられた通りにすることを拒んだのである。今日あまりにも多くの人々が、神の律法は廃止されたと考えている。神の戒めの代わりに、彼らは身分達の方法で何でもやっとうと決心する。彼らは神の安息日を拒絶し、偽りの安息日（日曜日）を制定する。昔のイスラエル人のように、彼らもまた失敗するであろう。

◆十戒――信仰それとも行い？

意外なことかも知れないが、十戒には否定的な側面が1つもないと、ホワイト夫人は述べている。それらはすべてが約束なのである。

「シナイ山でキリストによって語られた10の尊い戒めは、神の御品性の啓示であった。そしてそれは神は全人類をその管轄下に置かれているという事実を世に知らしめるために語られたのである。人間に与えられ得る最高の愛を記した10の戒めは、天からの約束として魂に語られた神の御声なのである。「これを行いなさい。そうすれば、あなたはサタンの支配下に落ちることはないでしょう」と。これらの戒めに否定的な側面は存在しない。そのように書かれていてもである。そこに書かれているのは「行いなさい」そして「生きなさい」である。・・・主は御自分の尊い戒めを、その被造物のまわりを囲む防壁とするためにお与えになったのである（神の息子、娘たち53ページ）。

私達はしばしば十戒を何か私達が完璧に行わなければならない、さもなければ永久に有罪とされるものとして見てきた。それがなければどんなにいいかと、思ってしまうことがしばしばある。その言い回しは非常にきつく、その要求は厳しく否定的であるように思われる。多くの人達が、すべての戒めを守ろうと試みてきたが、不可能であることを悟っただけであった。通常私達はそれらを、肯定的なものというよりも否定的なものとして見てしまう。上挙げした引用文によると、十戒に否定的な側面は存在しないと述べられている。

救われるために私達は十戒を守らなければならないと、ある人達は信じている。十戒を守ることによって救いを見いだそうとするこの努力は、自分で自分を救おうという試みに等しい。つまりそれは、行いによ

る義認という偽りの教理を実現しようという試みなのである。

◆エンドレス・サークル（終りなき循環）

私達は行いによって自分自身を救うことはできないことを知っている。また戒めは依然として有効であることも知っている。私達は何を信じたらよいのだろうか。ここで通常私達はある循環（円）に陥ってしまう。「信仰によってのみ救われる」から「律法を守るべし」に、それから「律法を守ることによって救われる」という考えに到達する。にもかかわらず、私達は行いによって自分自身を救うことはできないことを知っており、再びスタート地点に戻って同じ循環を繰り返す、といった具合である。律法と信仰は相伴って作用することを理解するときに、初めてその循環から抜け出ることができるのである。神の言葉に対する信仰が義認と従順を産み出す。従順は神によって義とされた結果生じるものであって、その原因となるものではない。服従が救いを産み出すことはなく、救いが服従を産み出すのである。

◆調和した律法と信仰

私達が理解している信仰に、律法をどう当てはめたらよいだろうか。つまり、信仰によってのみ救われるという教理に、律法のどの部分がかかっているかということである。律法を正しく理解し守ることこそ、真に信仰を実行することになるのだと私は信じている。律法を1つ1つ取り上げて考えてみよう：

「あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはならない」（出エジプト記20：3）。

私達は神のほかに、いかなるものをも神

(々)とすべきではない。なぜなら他に神は存在しないからである。この戒めを守ることによって、私達は「私こそ唯一の神である」と言われたお方を神として信じることを、神と宇宙の前に示していることになる。他の神にではなく、真の神に完全な信頼を置くことになるのである。私達は神が言われることに信頼し、私達はそのお方のみ従うことを示していることになる。この戒めを守ることは、すなわち信仰を实践することなのである。

「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない。上は天にあるもの、下は地にあるもの、また地の下の水の中にあるものの、どんな形をも造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神であるから、わたしを憎むものには、父の罪を子に報いて、3、4代に及ぼし、わたしを愛し、わたしの戒めを守るものには、恵みを施して、千代に至るであろう」(出エジプト記20：4～6)。

この戒めを守ることは、私達が自分の手で造った何かではなく、神に全面的に信頼を置いていることになる。もし私達が自分で造ったものに信頼するならば、間もなく自分自身を信頼し始めるであろう。私達は神に対する信仰によってのみ救われるのであって、私達にできる何かが神とその救いの業を進展させるのではないことを、私達が知るようにと神は望んでおられる。偶像を造ることは、神を自分達に似せて造ることである。それは、神を自分達のレベル(水準)にまで引き下げようという試みに他ならない。この戒めを守ることは、すなわち信仰を实践することなのである。

「あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないではおかないであろう」(出エジプト記20：7)。

この戒めを守ることは、神の約束と賜物を真剣に受けとめることにより、私達の信仰を神に置くことである。神の御名をみだりに唱えるということは、神が言われ、私達のためになされた事をよく認識せずに、御名を軽率に用いることである。この戒めを守ることは、神の御品性を私達が大いに尊重していることの表れである。破ることは、中途半端な献身の表れであり、神の約束に全く信頼してはいないと言っているのと同じである。この戒めを守ることは、すなわち信仰を实践することなのである。

「安息日を覚えて、これを聖とせよ」
(出エジプト記20：8)。

この戒めを守ることは、始めに神は人を完全な者として造られ、神が再びそれをして下さることを信じることによって、私達の信仰を神に置くことである。これについてはこの前の記事「安息日の意義」で取り上げた。この戒めを守ることは、すなわち信仰を实践することなのである。

「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜る地で、あなたが長く生きるためである」(出エジプト記20：12)。

この戒めを守ることは、父母を敬うことを教えておられる神に信仰を置くことである。私達をこの世に誕生させてくれた両親に対する敬意の念を持つようにと教えるこの戒めは、私達にとって重要である。もし私達が両親を敬うことができれば、私達はもっと容易に天の父を敬い、信頼することができるのである。両親を敬い信頼することを学び、彼らは私達の益のために存在し、私達にとって最善のことをしてくれることを知るのには、私達が天の父に対して信仰を

持つ手助けとなる。この戒めを守ることは、すなわち信仰を実践することなのである。

「あなたは殺してはならない」（出エジプト記20：13）。

この戒めを守ることは、神は私達のために正しいことをして下さると信頼することによって、神に信仰を置くことである。これはたとえ私達が他の人の生命を奪うのを拒んだために、自らの生命を失うことになっても同様である。もし誰かが私達を殺しにやって来て、私達が敢えてその人の生命を奪ってまで自己防衛をしないならば、私達は最善の道を御存知であられる神に信頼していることになる。「見よ、彼はわたしを殺すであろう。・・・しかしなおわたしはわたしの道を彼の前に守り抜こう」（ヨブ記3：15）。この戒めを守ることは、すなわち信仰を実践することなのである。

「あなたは姦淫してはならない」（出エジプト記20：14）。

この戒めを守ることは、神に信仰を置き、教会と神の関係を理解することを学ぶことである。神はねたむお方であり、私達が他のいかなる神とも関係を持つのをお望みにならないことを、この戒めから学ぶのである。姦淫を犯すことによって、私達は自分の配偶者との関係を築き保つことができなことを示す。もし自分が欲する誰とでも自由に関係を持つことが許されれば、子供を育て、健全な家族関係を維持する雰囲気をつくり出すことができなくなるであろう。その結末は混乱である。健全な家族関係を築き損なうと、神との健全な関係をも築き損なうのである。この戒めを守ることは、すなわち信仰を実践することなのである。

「あなたは盗んではならない」（出エジプト記20：15）。

この戒めを守ることは、神が私達のすべての必要を満たして下さると信じることによって、神に信仰を置くことである。神が備えて下さるので、私達は盗みをする必要がない。たとえ死にそうになったとしても、私達は盗みをしない。なぜならこの世での生と死は、神にかかっていることを、私達は知っているからである。どんな過酷な状況下にあっても、私達は神の御旨に信頼するのである。この戒めを守ることは、すなわち信仰を実践することなのである。

「あなたは隣人について、偽証してはならない」（出エジプト記20：16）。

この戒めを守ることは、利得のために嘘をつく必要はないと信じることによって、神に信仰を置くことである。神が備えてくださる。偽証は自分自身が得をしながら、他の人を陥れるために最もよくなされる方法である。しかし神は、私達をキリストにあって得をさせて下さる。キリストは私達を義とされるお方であり、贖い主である。この戒めを破ることは、私達が行いによる義を信じていることの証拠である。私達は他の人をけなすことによって自分自身を正当化しようとする。偽証してまで、他人の前で自己を正当化しようとする必要はないのである。私達は神の正当化（義認）に信頼し、それによって平安を得る必要がある。この戒めを守ることは、すなわち信仰を実践することなのである。

「あなたの隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、しもべ、はしため、牛、ろば、またすべて隣人のものをむさぼってはならない」（出エジプト記20：17）。

この戒めを守ることは、他の人の持ちものは自分にとって重要ではないということによって、神に信仰を置くことである。私達は自分の持っているものだけで充分である。もっと何か必要なものがあれば、神がそれを備えて下さるであろう。現在それを持っていないならば、それは神が私達に与えて下さっていないからである。神は私達に取って不必要なものを御存知である。私達は神の判断に信頼する。この戒めを守ることは、すなわち信仰を实践することなのである。

信仰は従順をもたらす。不従順は信仰が欠落しているために起るのである。ありとあらゆる実際的な目的のために、すべての戒めは与えられたのである。

◆現代の真理に当てはめる

ある人達は従順が必要であるという。必要なのは信仰だけであるという人達もいる。どちらも他方なしにはあり得ないというのが本当である。それらは密接に関わり合っている。一方は他方の結果生じるのである。

現代の真理とは、イエスが天の至聖所で何をしておられるかという、メッセージのことである。それは獣の印を受けるのを拒むことである。それがすなわち第3天使の使命であり、信仰による義認の教理である。現代の真理は、カレブとヨシュアの話にまでさかのぼる。現代は私達にとって、約束の地に入って行く時である。でも、どのようにして入って行けばよいのだろうか。神の約束に対する信仰によって、入って行くのだろうか。それとも他の努力によってであろうか。

私達が裁きに入る備えができるように、神はすべてに必要なものを備えられた。イエスとその御血が至聖所に置いて、私達が罪のとがめと呪いから最終的に清められるための信仰を持つようにと待っておられる。はたして私達は、自分自身と約束の地にいる巨人（私達の内にある罪）を見て、しり

ごみするだろうか。それとも信仰のうちに神を見上げて、最後の贖いを受けるだろうか。

第3天使の使命は信仰を説いている。アダムの罪は、信仰放棄罪であった。聖書には全体にわたって、信仰の物語が載っている。従順は信仰の結果生じるものである。次に出てくる人物は、皆従順であった。彼らは信仰によって従順であったのである：

信仰によって、ノアは・・・信仰による義を受け継ぐ者となった。信仰によってアブラハムは・・・信仰によって、サラもまた、・・・信仰によって、イサクは、・・・信仰によって、ヤコブは・・・信仰によって、ヨセフは・・・信仰によって、モーセは・・・信仰によって、人々は紅海をかわいた土地をとおるように渡った・・・信仰によって、エリコの城壁は、・・・くずれおちた。信仰によって、遊女ラハブは、・・・このほか、何を言おうか。もしギデオ、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう・・・（ヘブル11：7～34）。

◆イスラエルの歴史を研究する

約束の地に入る直前の、イスラエル人の歴史を研究するのは非常に重要である。ホワイト夫人は、次に挙げる引用文の中でこのことを明確にしている。「我々はその民の歴史を繰り返している」と、彼女は述べている：

カナンの地に入る直前のイスラエルの子らに、サタンの罠が仕掛けられたように、我々にもサタンは確実に罠を仕掛けている。我々はその民の歴史を繰り返している。軽薄、虚栄心、快楽を愛する心、利己心そして不純が我々の内で増大している。今断固として恐れずに神の勧告を宣言する人物が、

求められている。それは他の人々のようにまどろむことなく、しっかりと目を覚ましている人物である。我々の牧師達に聖さと力が大いに欠けていることを知り、彼らが自己賞揚に懸命になっているのを見て、私の心は激しく痛んでいる。もし彼らがただイエスのほんとうの御姿と、自分自身の本性を見ることができたならば、自分達が主とはあまりにも異なって弱く、無能なことを知って、彼らは「もし私の名が生命の書の最も目立たない所に載っていれば、私にはそれでも充分です。私のような者が主の御目にとまるとは、あまりにももったいないことでもあります」と言うであろう（教会への証5巻160ページ）。

◆入る時

今こそ約束の地に入る時であり、その時が来てからもう何年もたってしまっている。今こそ信仰を働かせる時である。私達は天の至聖所でイエスがなしておられる働きを研究し、イエスに協力しなければならない。私達は裁きに入らねばならない。

次に挙げる2つの証の書の引用文は、「このメッセージ（第3天使の使命）を信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる」と私達に告げている。この働きは十字架上におけるイエスの死と同じくらい、救いの計画にとって不可欠なものである。

イエスは、聖所における奉仕を終り、至聖所にはいって、神の律法を納めた箱の前に立たれたときに、世界に対する第3の使命をたずさえたもうひとりの力強い天使を、お送りになった。・・・第3の天使は、

「ここに、神の戒めを守り、イエスを信じる信仰を持ち続ける聖徒の忍耐がある」と言って、メッセージを終わっている。彼は、この言葉を繰り返したときに、天の聖所を指さした。このメッセージを信じるすべての者の心は、至聖所に向けられる。イエス

はそこで箱の前に立って、恵みがなお与えられているすべての人々と、知らずして神の戒めを破った人々のために最後の仲保をしておられるのである。この贖罪は、生きている義人とともに、死んだ義人のためにも行われる。これは、キリストを信じて死んだすべての人を含んでいるが、彼らは神の戒めに関する光を受けなかったために、知らずして戒めを破って罪を犯したのである（初代文集414、415ページ）。

天の聖所における、人類のためのキリストのとりなしは、キリストの十字架上の死と同様に、救いの計画にとって欠くことのできないものである。キリストは、ご自分の死によって開始された働きを、復活後、天において完成するために昇天されたのである。われわれは、信仰によって、「わたしたちのためにさきがけとなって、はいられた」幕の内に入らなければならない（ヘブル6：20）。そこには、カルバリーの十字架からの光が反映している。そこにおいて、われわれは、贖罪の奥義について、もっとはっきりした理解を持つことができる。人間の救済は、天が無限の値を払うことによって達成された。払われた犠牲は、破られた神の律法の最大限の要求に相当するものである。イエスは、父なる神のみ座への道を開かれた。そして、信仰によって彼に来るすべての者の心からの願いは、彼のとりなしによって、神の前にささげられるのである（各時代の争闘下222、223ページ）。

★まとめ

1. イスラエルの子らは、神に信頼すべきであった。神が御自身を信頼に値するお方として、示しておられたからである。神が約束の地に入るようにと彼らに告げられたとき、彼らはそのようにすべきであった。

しかし、彼らは信仰を持って従おうとしなかった。

2. 従順と信仰は、互いに密接なつながりを持つ。従順は、信仰の結果自然に生じる。真の従順は信仰によってのみ起る。
3. モーセの時代の神の民がそうであったように、今日の民も、約束の地に入ることに失敗してしまった。E.G. ホワイトは、「我々は、その民の歴史を繰り返している。」と述べている。...
4. 神の律法に否定的側面は存在しない。十戒はすべて約束である。もし私達が神に信仰を置かならば、神は聖霊を通して、私達の内に働いて下さる。

5. 従順は義認の結果生じるものであって、その原因とはならない。従順は、神とその約束に信頼した自然の結果である。私達は信仰によってのみ義と認められるのであり、律法の行いによるのではない。
6. イエスが天の至聖所で何をしておられるかを研究することは、十字架におけるイエスの死を研究するのと同様に、重要なことである。
7. 今は裁きに入る時である。裁きとは、第3天使の使命、すなわち、信仰による義認である。私達は、イエスの生と死に信仰を置くことによって、裁きに入るのである。

【砂川満訳】

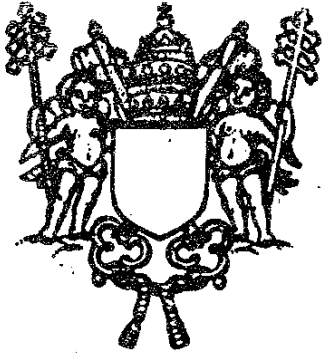
歩くこと

—最も良い運動、治療法の一つ

E.G. ホワイト

1. 戸外で、天の活力を受けつつ歩くこと、また、花や、小さな果樹、野菜を世話するような、朝の運動は、血液の健康的な循環に必要である。それは、風邪や、せき、頭脳や肺の鬱血、肝臓や腎臓、肺の炎症また他の幾千の病気に対する確かな保証である。HL 574
2. 歩く運動ほど、全身の各部に利益をもたらすものとして証拠があがっているものは他にない。戸外で、活発に歩くことは、ご婦人方が健康を保つうえで、他のどのどんな方法でも得られない事をする。歩くことは、弱いものが健康を回復するのに最も効果的な治療法の一つでもある。HL 572
3. 歩くことに代わる運動は、他にない。それによって血液の循環が大いに改善される。... 歩くことは、大体どんな場合にも、病気の体に最善の治療である。なぜなら、この運動では、体のすべての器官が使われるからである。HL 570
4. 運動は消化器の機能を健全にし、胃弱な者を助ける。食事直後の過激な勉強、乱暴な運動は消化の働きを妨げるが、食後姿勢を正しくして短距離の散歩をすることは大いに益となる。

ミニストリー 217



激動の嵐—最後の戦い

ヤコブ 11:40~45, 12:1~8



—その2—

フセイン大統領は、去年の湾岸戦争の始まりの時に、「これは母なる戦いである」と宣言した。どんな意味があるのか私には分からないが、私はその言葉を借りてこう言いたい：いよいよ人類は、本当の戦い、元々の戦い、善と悪、キリストとサタンとの大争闘、「各時代の争闘」の終幕、すなわち「母なる戦い」を迎えた。人類史上のかつての戦いは、たいてい国と国、民族と民族との戦いであった。最後の戦いは、宇宙的意味を持つ人類歴史総まとめの戦いである。天で始まった戦いの終結である。サタンはこの戦いの本質を6千年にわたって隠してきた。単なる人間同士の戦いと思いつまませてきた。しかし、6千年の最後になって、ソ連とアメリカの2極体制のもとでの冷戦も終わり、「母なる戦い」の序幕となった。今はまだ"IMMPENDING CONFLICT"「迫り来る戦い」にあり、"FINAL CONFLICT"「最後の戦い」の直前に我々はいる。アメリカで始まる日曜休業令からサタンに操られる地上勢力は、「神の戒めとイエスの信仰を守る聖徒」たちに戦いを挑んでくる。アメリカが代表する資本主義とソ連が代表する共産主義との戦いではないことはもう分かった。有神論パチカン？（一般的な言い方）と無神論共産圏の戦いでもない。最後の戦いは、神の戒めを擁護する神の民に対してその矛先が向けられるのである。全く予想しない戦いが展開されるのを見て、世の人は驚くであろう。それがダニエル、黙示録に預言されているのである。

11:40からの「終わりの時になって」展開される戦いは象徴的に解釈されるべきもので、字義どおりに解釈してはならない。なぜなら：

- ① 北の王は法王教であるから（後程説明する）、法王教に挑戦する勢力がエジプトであるとは考えられない。
- ② パレスチナでグローバル（世界的）なハルマゲドンの戦いがなされるはずがない。ある人は、エゼキエル38章の預言のように、北の王と諸国がエルサレムに攻撃するとき、エホバの神が介入なさり、イスラエル（字義通りの）が勝利すると教えている。
- ③ エドム、アンモン、モアブ民族は現存しない。
- ④ エジプト、リビア、エチオピアはローマ法王教の欲しがる富を持つ国ではない。現在は貧しい国である。
- ⑤ ダニエル書、黙示録、証の書は、最後の戦いを神の戒めとイエスの証を持つ神の民と、「獣と龍と偽預言者」との戦いを描写しているのである。
- ⑥ ダニエル書の預言の解釈の原則は、「繰り返し、平行、拡大」の原則である。ダニエル2章、7章、8章、11章の4つの預言は、バビロン、ペルシャ、ギリシャ、ローマと世界帝国の移り変わりを繰り返し、更に詳しく描写しているのである。最後の支配勢力

はローマであり、ローマ法王はその続きなのである。だから、7章、8章の預言で第4の獣から出てくる一つの小さい角がはなはだ大きく発展して裁きの時まで支配すると描かれているのである。預言の霊でも最後の世界支配権力、神に敵対する権力としてローマを挙げている。

アンカー9号であつかったダニエル11:40~の預言の研究を復習してみよう。
「終わりの時」は1798年から始まった。
(ダニエル2:4~7)。

「彼(北の王)」に挑戦する「南の王」とは、昔はエルサレムから見てエジプトであった。終わりの時には、預言の解釈では無神論権力を象徴する。(黙11:7、8;大争闘上の344、5を見よ。)聖書歴史において、大胆に、公然と国家として生ける神を否定した国はエジプトをほかにしてない。

「パロは高慢に答えた。『主とは一体なものか。私とその声に聞きしたがってイスラエルを去らせなければならないのか。私は主を知らない。またイスラエルを去らせはしない』これは無神論である。そして、エジプトにたとえられた国は、同様に、生きた神の要求を拒み、同じような不信と反抗の精神をあらわすのである。」大下345。

終わりの時になって激しく神の存在を否定する無神論権力が現れる。それは共産主義で、「神はいない」「宗教はアヘンである」と暴言を吐くのである。

我々は「終わりの時」になって、北の王ローマに対して、共産主義が猛攻撃をしたことを知っている。世界大戦は別として、赤の旗印のもとにポーランド、ハンガリー、ユーゴスラビア、その他の東欧のカトリッ

ク国で幾千幾百万の人々が殺害された。猛烈な勢いで共産主義は世界に広まっていった。

では、続けて40節からの預言を考えてみよう:

しかし、「北の王」ローマ法王教は、反撃するのである。「北の王」は「つむじ風のように彼(南の王)を攻め」る。

法王教は多くの者にローマこそ共産主義に対するとりでなのだとの宣伝を信じ込ませた。ローマはアメリカを初めとして西側諸国を取り込んで「反共」運動を展開した。

しかし次に打った手は今までの「反共」「対立」路線を「協調」「和平」路線に変えることであった。特に1962年のパチカン第二公会議から目立って取り入れられた戦略であった。

「ローマ教会の抜け目なさと狡猾さには驚くべきものがある。この教会は、何が起るかを読み取ることができる」大下339。

「北の王」という言葉は、15節以降使われていない。しかし、25節にくると「南の王」に挑戦するのは「彼」「北の王」ローマであることが分る。ダニエル11章の前半の聖句ではシリアのセレウコス王朝が北の王である。この王朝はギリシャ帝国から分かれたものであった。シリアはローマによって征服されてから、ギリシャ帝国の他の国々と同じようにローマ帝国に合併された。だから、現代において北の王を昔のシリア王朝に当てはめようとするのは、的から大きくはずれていることになる。

旧約時代において、北からの勢力はイスラエルの国を脅かす大敵であった。「北の

王」とは、エルサレムを中心として見た言い方であった。だから、終わりの時の「北の王」というときも、終末時代の真の教会の大敵であると言わなければならない。今日神の民は世界に散在しているので、「北の王」を地理的に解するのは何の意味もない。

何といても、バビロンはイスラエルの国の最大の敵であった。バビロンは北の王として何回も表されている。(エレミヤ1:14; 4:5~7; 6:1; 10:22; 13:20; 16:15; 20:4; 23:8; 25:9、12) この都はニムロデによって建設され、古代世界において大宗教センターとなったのである。それはエルサレムのライバル、サタンの勢力であった。バビロンがアッシリア帝国に包括されていたときにも宗教のセンターであり、第二の首都であった。アッシリアのある王たちはバビロンの王という肩書きを採用した。マナセはアッシリアの支配の時にバビロンに捕囚となった。アッシリアも北からの勢力と呼ばれている。(ゼバニヤ2:13; イザヤ14:31; ナホム1:1; 3:1、19)

メドペルシャがバビロンを征服したとき、そこを帝国の中心にした。クロスの肩書きの一つはバビロンの王というものであった。「北の王」という表現は、メドペルシャにも使われている。(エレミヤ50:9)

バビロンは、アレキサンダーの帝国の中心でもあった。彼はそこをギリシャ帝国の大首都にしようと計画していたときにそこで死んでしまった。今度はセレウカスが北の王となったとき、彼はバビロンを彼の第一帝国としたのであった。

また確かにローマは新世界の政治的、宗教的、大バビロンとなった。

「クロスがサタンの宗教制度の座、バビロンの都を勝ち取ったとき、カルデヤの神秘宗教の大司祭とその従者の司祭たちがこの都を逃れてついにペルガモにたどり着いた。そこで彼らはバビロンの礼拝を再建し、そこでペルガモの王を彼らの宗教の大司祭としたのである。彼らの司祭-王の最後のアラッタス三世が133B.Cに死んだとき、彼の王-司祭の職位、最高神官(最高司教)(PONTIFEX MAXIMUS)をローマ帝国に譲ったのであった」テラー・バンチ(Taylor Bunch, The Seven Epistles of Christ p150)

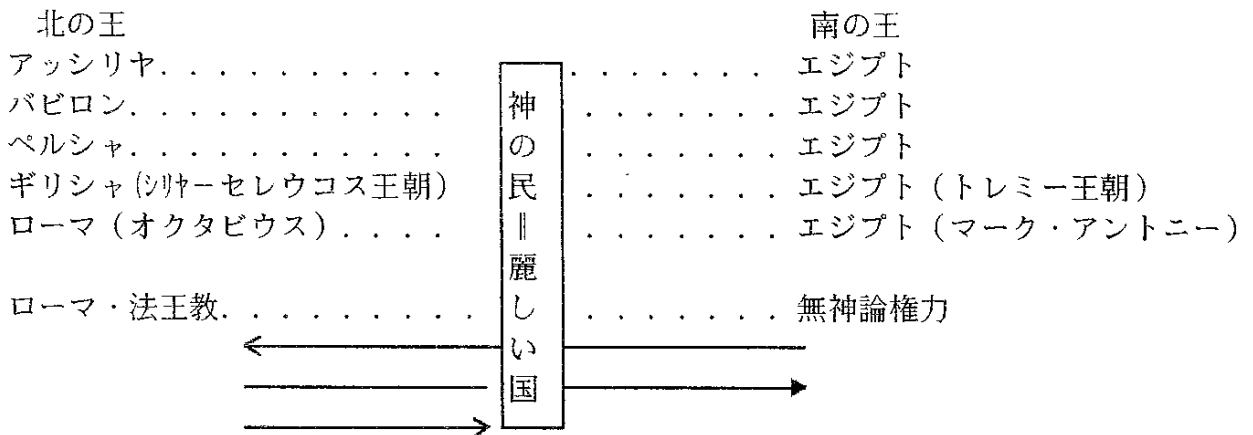
初代のクリスチャンたちは7つの丘の都(ローマ)を象徴的にバビロンと呼んだ。ローマカトリックの新約聖書(米軍のための)の黙示録14章の脚注には、「バビロン:ユダヤ人、クリスチャンの間では、バビロンはローマと同意語である」と言われている。

ローマの法王たちはシーザ(皇帝)を相続し、今日に至るまでなお、彼らはバビロンから、ペルガモの王を通して譲り渡された宗教的肩書きをつけている。すなわち、最高司教(PONTIFEX MAXIMUS)大司教、ローマ教皇(POPE)と。黙示録17章は、ローマの教会のことを「大いなるバビロン、淫婦の母」と表現している。

幾世紀にわたって中東のバビロンがイスラエルを悩ました北からの大いなる勢力として描かれているように、黙示録、ダニエルの大預言で「大いなるバビロン」が北からの王と呼ばれていることは何と的を射た表現であろう。エジプトというとき、一つの国の活動というよりもっと広い意味でとらえるように、この神秘的なバビロンも背教した宗教界の総称してとらえるべきであろう。そして勿論法王教がその頭である。法王教が「北の王」という肩書きにふさわ

しい理由がまだある。古代イスラエルの歴史を通じて、文明社会は幾度となく繰り返される北の王と南の王の戦いを目撃した。アッシリヤとエジプトは、さんざんな戦いを繰り返し、ついに南の王が敗北した。それからまたバビロンとエジプトが優位を争い、またエジプトは敗北する。ペルシャの王カンビセス統治の時にも戦われた。先述したように、ダニエル11章はギリシャか

ら分かれたシリヤとエジプトの戦いを細かく描写している。ついにローマとエジプトが世界支配をねらって戦いを交わす。紀元前31年アクチムの戦いであった。パレスチナのユダヤ人は果てしなく繰り返されるこの二つの勢力の戦いを目撃したばかりでなく、悲惨にもそれに巻き込まれるのである。



終わりの時に移っても、世界はなお相反する二つの陣営に分かれているのである。宗教界をリードする法王教、無神論世界をリードする共産主義である。神の民イスラエル(比喩的な)は、この二つの相反する勢力の間で真理の戦いを続けているのである。一方には偽の宗教、他方には無神論、不信、進化論、エジプトの暗黒がたちだかっている。

この数年間に、我々はバチカン、現代のバビロン、ローマが見事にソ連の代表する無神論、共産主義を崩壊していくのを見せられた。1989年暮れからの動きを世界の人々は「激変」と呼んでいる。ライフ誌や、文芸春秋等に「東欧、ソ連の自由化はローマ法王教の勝利」と表現された。しかも興味深いことに聖書と同じく「つむじ風のごとく」という表現を使っているのである。人々は「旋風」のように、北の王ローマ法王教が世界を制覇していくのを目撃しているのである。

ジェームス・ホワイトの推論の通り、ダニエル2章、7章、8章に登場する最後の世界権力はローマであり、また、11章も同じ預言の系列を追っているのであるから、11章に登場する最後のパワーはローマである。このパワーが「北の王」と呼ばれているのである。

その戦略は何であろうか？ 次回に続く。

台頭する宗教

脱冷戦の世界

ポスト冷戦の世界で「宗教」が「民族」と並んで政治・経済の動きを鋭く解ききつワードとして浮上ってきた。ソ連・東欧では永年続いてきた教会への弾圧が解かれ、宗教が活躍の場に代わる価値観として民主化の一翼を担いつつある。カトリックの総本山バチカンも影響力拡大を狙い、新世界秩序構築を目指す米国の連携を強めている。一方、宗教パワーは既成の国家の枠を突破し、地域の分離・独立の動きを加速させる不安定要因にもなり始めた。変わる世界と宗教のかかわりを追った。

政治と結び付く

ソ連の中央アジア地域で今、イスラム教のモスクが精々と数を現している。カザフ共和国では、昨年暮時点で二十五以上のモスクがまたたく間に二

百三十に増えた。タジク共和国でも、この三年間でモスクの数は一八倍になった。

ペレストロイカ(改革)による宗教自由化で、抑圧されていた宗教が急速に息を吹き返して

ガリ、ルーマニアでは、第二次大戦後に共産主義政権に没収されていた教会領地の返還が始まった。

こうしたソ連・東欧の宗教復興は、戦後政治の枠組みを揺る

政治のシロ・バルバ

ワドである米国と、宗教のシロ・バルバワドであるバチカンの接近は、その地盤。

十一月下旬、マシシユ米大統領は北大西洋条約機構(NATO)の首脳会議をむかひに出席して、

ローマ法王ヨハネ・パウロ二世の待つバチカンを訪れた。通訳坂きの会談で両者は「冷戦後の新世界秩序への新たな役割を果たすが、じつくりと話し合

った」とバチカンの動向に詳し

替とついても。

バルト三国がソ連邦からいちはやく離脱したのは、三国がカトリック・プロテスタントに

正教国のロシア共和国と宗教的衝突が顕著なところとを二つの原因とした。

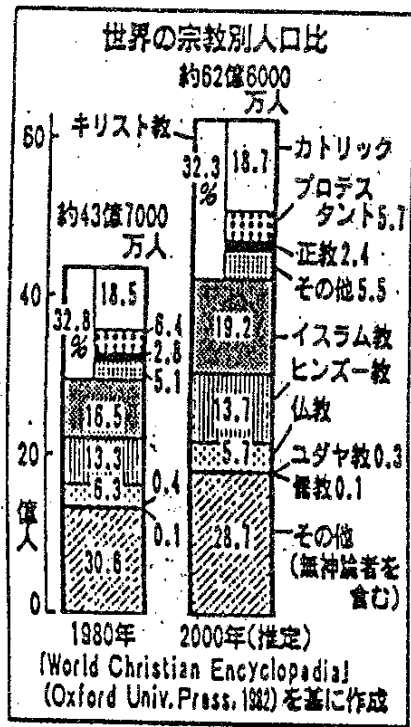
独立運動を加速

一方、バルコがセルバイヤン共和国を早い段階で承認した。バルコメン共和国がソ連と運輸会社の合併を決めるな

新秩序のカギ握る

がさまざまな現象を幾つも引き起こしている。第一に、イデオロギーの崩壊で生じた空白を埋める形で影響力を助ける動きがある。宗教界と、その影響力を取り込む動きがある。政治界との間に、これまでになく強力な関係を築き

い。東欧は揺るぎある。中国の人々も、イスラム系の共和国は中東諸国と新しい関係を築いて、一歩進んだソ連の分岐点、カトリック・プロテスタント、正教国、イスラム圏と、宗教をベースとしたソ連のグループ化の進行とよめる。



対立・紛争の新たな火種に

この通の分岐を最も警戒しているのは、現れた社会主義大国、中国だ。新疆(しんきやう)ウ

が強い。

世界は既に民族紛争が多発する時代に入っている。これに宗教が加わることで、紛争が一層エスカレートして、複雑化する傾向はユーロの内戦に似ているとされている。独立を宣言した北部のシロネ、シマ、シロア

イスラエル自治区などには十四万人を超えてイスラム教徒、チベット自治区などには四百万人以上のイスラム教徒がいる。この通の宗教紛争は、既に表面化している

チベット共和国がカブリン、チベット共和国のセルビア共和国は正教圏で、この宗教の通を核として争いが起る可能性がある。対立を激化させた。

中国国内の分離・独立運動を促した面から加算する可能性

対立の核が、あつちあつち

つらいつらいつら

現実路線回帰も

急激的な宗教運動が、その現実的な路線に回帰する例も少なくはない。ホメイニ師のイスラム原理主義革命から十二年を経たイランの政策は最近極端化、米露の国会議員選挙でも権威主義が培える手懸きをた

「イスラム教の教義追求」は、経済成長など実利的な目標を掲げつつある。この通の通を核として争いが起る可能性がある。対立を激化させた。

世界内部では「イスラムの通帯」や「アラブの大義」を掲げて叫ぶ。その、米露がイスラエルとの間に現実的な関係を構築して、内政の発展に取り組みつつある。空気が暖かくなっている。半世紀にわたって争ってきたアラブとイスラエルが中東和平合議の場を通じて共存の道を探る始めた。この通、宗教紛争を激化させた

る強力な抑止効果を持つたる。したがって、民族間の利害対立、貧困や社会的不公平、先進国と発展途上国の利害対立などが残る限り、宗教は常に紛争の点火剤となり得る。

イデオロギーに代わって「民族」が国際政治の要因として浮上った今、もう一つの現象、「宗教」は現実の国際政治・社会の動きを注目した。水面下の動きを注目した。

「宗教」の世界」取材班

- 取材班は国際一部次長
 山本勲、河野孝、同部為
 定明雄、刀柄信久雄、佐
 藤隆一、藤野啓介、野沢
 正康、松尾博文、カイロ
 支店安岡兼次、ミラノ支
 店西川増志で構成した。

この通、宗教紛争を激化させた

宗教パワーの台頭

日経新聞の記事を聖書の預言の光に照らして考えてみよう：

1. ポスト冷戦の世界を読むキーワード-「宗教」

1990年になって、アメリカ、ソ連の2極体制は崩れ、冷戦は終焉と言われるようになった。東欧、ソ連の自由化、民主化はバチカンの戦略であったといわれる。その激変は予測できないほどの早さで進んだ。大国ソ連はついに崩壊した。次々共和国が独立し、独立国家共同体へ参加、調印へとエスカレート。今後の政治、経済を読むキーワードは「宗教」であると感じ始めている人々がいる。政治、経済、民族、社会、環境問題...を解くのは宗教問題だということを知っているバチカンは全世界の大宗教連合をもって世界支配をねらっている。



アーノルド・トインビーの言った「21世紀は宗教の世紀」は思ったより早く来るのであろう。

2. 新しい世界秩序

ブッシュ大統領が就任するや否や世界に向かって歌い出した言葉である「新しい世界秩序構築」は、「アメリッポン」(ブレジンスキーが作った言葉) = 日米運命共同体 グローバル・パートナーである日本(海部総理)とデ1エット(2部合唱)をするようになり、やがて4部合唱になり、世界のリーダーたちが加わり、今や大合唱

になりつつある。この「NEW WORLD ORDER」(新しい世界秩序)の大合唱の指揮者はアメリカである。しかし、マネージャーはバチカンであることを忘れてはならない。今年12月に実現するE. C統合(ヨーロッパ共同体)は、加速度的に世界共同体へと進むであろう。ある人はヨーロッパ合衆国、世界合衆国と呼んでいる。

3. バチカンの「新世界秩序構築」は米国との連携で

この点も聖書の預言と見方を一つにして

いる。黙示録13章には、二つの獣が登場する。「先の獣」と「小羊のような角を持った獣」である。つまり、カトリシズム・バチカンとプロテスタント・アメリカである。「宗教界と為政者との間にこれまでにない協力関係が生まれつつある」その典型は「政治のグローバルパワーである米国と、宗教のグローバルパワーであるバチカン」と表現されている。

アメリカは国家として宗教界の支持を得て、

「法王制が旧世界において失った至上権を、プロテスタント・アメリカにおいて再び得るための戸を開いているのである」大下331「アメリカは宗教自由の国として、偽りの安息日をあがめるように良心を強制し、人々に強要することにおいて法王教と結合する。そして全世界のすべての国の人々がその模範に従うように導かれるであろう」6T18。

米国とバチカンが提携する理由は、法王

制の權威の印である日曜日を強要するためであることに注目して頂きたい。

「法王制に忠順の意を表すのは米国だけではない。かつてローマ教会の支配を承認した国々におけるローマ強化の影響力は、なお破壊されずに強く残っている。．．．」

「旧大陸においても、ローマ教会の權威だけに基づいている日曜休業令制度をあがめることによって、人々は法王制に忠順の意を表明するのである。．．．」

「今日起っている数々の出来事のなかに、その預言の成就に向かって急速な発展がみられる」大下338。

アメリカ衰微論も飛び交っているこの頃であるが、世界を強制的な力をもって世界政府樹立に向けるのはアメリカである。今でこそ日本はバブル経済の繁栄に浮かれて、世界から経済的援助をあおり立てられているが、いつバチカンの世界支配の罾に陥ってしまうかは時の問題である。

4. 既成の国家の枠を突き崩し、分離・独立を加速させる要因

「新しい世界秩序構築」のためには、いったん既成の国家の枠を突き崩して、それから新しい世界合衆国を作るシナリオは、今日ソ連邦の崩壊と独立国家共同体が生ま

れつつあるのをみても分かるのではないだろうか。中国、キューバ、北朝鮮がどれほど速やかに新秩序に組み込まれるかはまもなく分かるであろう。

5. 宗教大連合の中で、イスラムパワーを

イスラムパワーをどう取り込むかがバチカンの課題のようであるが、もうイスラムパワーの敗退間近であることを読むことが出来る。「今日イランの政策は最近『穏健化』し、「イスラム教の教義追及一辺倒から経済成長など実利的な目標にも目が向いてきたこと」が指摘されている。「湾岸戦争を契機に、アラブ世界内部では『イスラムの連帯』や『アラブの大義』を声高に叫ぶより、米国やイスラエルとの間に現実的

な関係を構築して、内政の安定に取り組もうとする空気が強まっている」

これまたバチカンの経済戦略の手と言えないだろうか？

「悪天使たちは勢力を結集して、陣地を固めている。彼らは最後の危機のために強化されつつある。まもなくこの世界に大変化が起ろうとしているが最後の運動は急速なものとなるであろう」ク奉70。

24ページから・・・・・・・・・・

に入られてから諸教会はあらゆる汚れた、憎むべき鳥に満たされたのをわたしは見た。．．．無数の悪天使たちが全地に広がって、教会に満ちている。これらのサタンの手下たちは、宗教団体を見て狂喜している」初文443～445。

「名目的諸教会は、ユダヤ人がイエスを十字架につけたように、三天使の使命を十字架につけ、そのために彼らは、至聖所に入る道を知らず、そこにおられるイエスの仲保の恵みを受ける事ができない事を、わたしは見た。彼らは無益な犠牲を捧げていたユダヤ人のように、イエスが去ってしまった部屋に向かって、彼らの無益な祈りを捧げている。．．．

教会は意気盛んになって、神が彼らのために驚くべき働きをしておられると考えるのであるが、それは別の霊の働きなのである。興奮はさめて、世界も教会も、以前よりはさらに悪化した状態に陥るのである。

わたしは、神が名目的再臨信徒と、墮落した教会の中に、心の正しい人々をもっておられるのを見た。そして、牧師や信者たちが、災害が下される前にこれらの教会から呼出されて喜んで真理を受入れる事をわたしは見た。サタンはこの事を知っている。第三天使の大いなる叫びがあがる前に、サタンはこれらの宗教団体に、興奮を起こさせ、真理を拒んだ人々に、神が彼らと共におられると思わせるのである。サタンは心の正しい人々を欺いて、神がなお教会のために働いておられると彼らに思わせたいと願っている。しかし、光が輝き出る。そして、心の正しい人は皆、墮落した諸教会を去り、残りの民に加わるのである」初文423。

「こうした運動が起る前に、偽物を提示する事によって、それを妨害しようとする。彼は、自分の欺瞞の力のもとにおく事のできる諸教会において、神の特別な祝福が注

がれているかのように見せかける。大いなる宗教的関心と思われるものが現れる。多くの人々は、神が彼らのために驚くべき事をしておられると喜ぶが、それは別の霊の働きなのである。宗教的よそおいのもとに、サタンは、キリスト教世界に自分の勢力を広げようとする」大下190。

★初代文集448-

1844年以来教会に入り込んでいる墮落についての警告がつけ加えられて、繰り返されている。

★5T473-

サタンが背教した諸教会のコントロールしている。

★大下348-

サタンは、．．．諸教会を通して自分の計画を進めようとしている。

★列王下1：3-

「あなたがたがエクロンの神バアル・ゼブブに尋ねようとして行くのは、イスラエルに神がないためか」

★CT255-「我が民は今日、世が知った最も偉大な教師から知恵を得るかそれとも、エクロンの神のそれを求めるかがテストされている。我々は固く心を定めようではないか。神の声を見極める事ができないもの達、また神の戒めを聞かないもの達の教育方針に一本すらも折り込む事がない事を」

他教派を真似る！

ローマ教会の世界支配戦略の一つに「エキュメニカル」運動がある。諸教会の「母教会」への接近を見て驚かされる。お互いに接近しつつある。我が教会にも接近している。そして我が教会も接近している。世界の政治、経済の動きは、ボーダレス世界、世界政府へと急速に動いている。宗教界もそうである。我が教会は「アドベンチストの焦燥」から、すばらしく見える他教派を真似ようとしている事があるだろうか？それは、世界伝道、教会成長の名目のもとになされるのであるから、何も悪い事ではなさそうである。しかし、危険があるのだろうか？

1. 他教派を真似る事はどうして危険なのだろうか？
2. 我が教会の説教のありかたも変ってきていないか？
3. いわゆる教会員増加運動の危険はないだろうか？大下196。アンカー6号参照。
4. 他教派に見られる魅力的な現象は、どこから来ているか？

「伝道の働きに変化が起っている。他教派を真似ようという欲望があって、単純さと謙遜さはめったに見られない。若い牧師たちは独創的であることを求め、働きに新しいアイデアを持込もうとする。ある者は伝道集会を開き、その手段によって教会に多くの数を集めようとする。しかし、興奮が終わると改心者はどこにいるのか？罪の悔い改めと告白は見られない。罪人は過去の罪と反逆を顧慮することなしに、キリストを信じ受入れるように訴えられる。心は砕かれない。魂の悔恨はない。いわゆる改心したと言われている者たちは、岩なるキリストに落ちていないのである。

旧新訳聖書はこの働きがなされるべき唯一の方法を示している。悔い改めよ、悔い改めよ、悔い改めよが、荒野のバプテスマのヨハネによって叫ばれたメッセージであった。人々に与えられたキリストのメッセージは『あなたがたも悔い改めなければ、皆同じように滅びるのであろう』であった。(ルカ13:5)。使徒たちは悔い改めるべきことをどこでも説教するように命令された。

主は今日ご自分の僕らに古い、福音の教理を、すなわち罪の悲しみ、悔い改めと告

白を説くように望んでおられる。我々はオールドファッション(旧式、古風な)の説教、オールドファッションの習慣、イスラエルのオールドファッションの父親、母親が必要である。罪人のためには彼らが神の律法の違反者であることを認めるまで忍耐強く、熱心に、賢明に働きかけなければならない。そして彼らが、神に対してしては悔い改め、主イエスに対しては信仰を行使できるようにしなければならない」2 SM 18, 19.

「第二天使が諸教会の墮落を宣言して以来、諸教会はますます墮落していった事をわたしは見た。．．．一般牧師の説教には、サタンを怒らせ、罪人を震えさせるものはない。また切迫した恐るべき審判の現実を人々の良心に訴えるものはない。悪人たちは一般に、真の敬神の伴わない信心深い様子を喜び、このような宗教を支持する。

「．．．サタンは、諸教会を一つにまとめて(団体として)全部占領してしまった。．．．真理が、イエスにあるがままの単純さと力をもって、世俗の精神に向けられると、それはただちに迫害の精神を引き起こすのである。．．．」と天使は言った。イエスが、天の聖所を出て、第二の幕の中

印刷物、テープのリスト

モーセと小羊の歌 デイブ・ミラー著 (郵送料共) 1000円

聖所からの光.	750
図解説明.	250
テープ.	400
仰いで生きよ.	50
ダニエル書と黙示録のテーマ.	150
開かれた門.	250
三天使の使命、1888年、そして今日 (D. K. ショート)	150
キリストの再臨に備える!	60
生きて主を迎えることと、死んで主を迎えることの違い	

サタンの畏. . TM472~475.	60
生ける神の印. 5T209~216、エゼキエル9章の注解	60
ラオデキヤ教会 3T266.	10
ヨシュアと天使 5T472~476.	30
証の軽視 5T75~83.	40
ふるい 1T179~181 (初代文集437~441)	20

教会の現状の描写!
後の雨、神の印を受
ける前の経験。
教会の中の二つの
グループ。

今! メリイ・マックリオド著 植田正志訳.	150
日曜休業令が出たとき、どんなことが起きるかを 想定して、書かれたストーリー	
パチカンの世界支配陰謀 I、II テープ.	700
その文.	
何故ユダヤ人はメシヤを拒んだのか? F.C. ギルバート	30
SDAに改宗したユダヤ人学者。教会学校の激しい 認可論争のあった頃に出されたきに出された記事	

次の印刷物は、米国のミセス波平のご厚意のプレゼントです。
欲しい方は、郵送料とともに申込んで下さい。

田舎の生活 (Country Living) E.G. ホワイト (郵送料. 120円)
世の終わりと獣の刻印 波平三枝子著 (伝道用) 175円

編集後記：

いろいろ忙しい事があって、アンカーの出版が遅れた事を申し訳なく思っています。環境が整い次第、毎月出版できる事を目標にしています。皆様のお祈りを願います。今の所、京都のミラーさんの方から、アンカー縮小版が出されています。読者のある方々は迷っておられますが、わたしたちの方で毎月出す事ができないためです。ワープロ、プリンター、印刷等のよりよい環境設定がなされるともっとひんぱんに、神が我が教会に与えられた重要な真理を出したいと思っています。我が教会はかつてないほどの危機に直面しています。永遠の運命が決定される事件が目前に迫っています。一人一人神からおわされている責任を果たして、主に会う準備を自らする同時に、恐るべき欺瞞の中に居る、バビロンに捕虜となっている神の民を呼出して、早く共に神に国を迎えたいと思います。

訂正：

P 2 3 - 1 3 行目「諸教会をコントロールしている」

最後の文：「我々は、神の声を見極める事ができないもの達、また神の戒めに耳を傾けないもの達の教育方針の一本の糸すらによっても縛られてはならないように、決意しなければならない」

P 2 4 - 約 3 0 行目「旧新約聖書」

SDAのロックシンガー (TAKE 6) 日本に上陸! (オークウッド カレジ) NKKBS ガイド

4日(火) ニルス・ロングレン
5日(水) ジェームス・テイラー・カルテット
6日(木) ローチフォード
7日(金) カンダ・ボンゴマン
8日(土) ビッグ・カントリー

英国直送 プリティッシュ・ロック

●10日月～13日休深夜

都はるみスペシャル

●29日3.00PM～6.00PM

歌手生活復帰後も精力的に活動する都はるみ。91年10月の東京・日生劇場のリサイタルと、歌謡ドキュメントをお届けする。



都はるみ

魅惑のアメリカン・コーラス・ライブ

●7.30PM～8.30PM

3日(月) レイ・コニフ・シンガーズ
4日(火) TAKE 6



ソウル・トレイン

●午前0時台

5日(水) ケニー・キャンブル、ソウルII ソウル、ジャネット・ジャクソンほか
6日(木) ボーラ・アブドゥル、セダクシオン、ギャップ・バンドほか
7日(金) ジョニー・ギル、ニュートロンス、マドンナほか

音楽ファンタジー

●2日(日) 6.00AM～2.30AM

国際芸術受賞作品、映像と音楽で綴るファンタジー「カルメン」
「大蛇」「時よ、お前は美しい……」

24日(月) 弘田三枝子
25日(火) あべ静江
26日(水) 渚 ゆう子
27日(木) 未定

ブロードウェイ・ミュージカルの相い手 アメリカの作詞作曲家たち アメリカン・ソング・ライターズ

●7日(金)、8日(土)、10日(月)～15日(土) 深夜

日本のロックライブ

●7.30PM～9.00PM

5日(水) ソフト・パレエ
6日(木) 英田麻里



ソフト・パレエ



★ この印刷物は信徒によるもので、皆様の祈りと自由献金によって続けられています。一部350円ほどの献金をお願いできれば幸いです。尚、資料代や献金などの送金には郵便振替をご利用ください。振替口座番号は下記です。

鹿児島 8-12121 サンライズ ミニストリー

住所 〒905-14

沖縄県国頭郡今帰仁村字今泊1471番地

サンライズ ミニストリー内 アンカー係

☎ 0980-56-2783

FAX 0980-56-5083

編集人：金城重博

1992年2月発行